令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 中尾 小学校 ）　　学校番号　０３６　　【様式】

目指す学校像	児童に、保護者に、地域に信頼される中尾小学校
重点目標	１　読解力の育成・向上・追究を目指し、学びの自律化に向けてＩＣＴを活用した授業の推進 ２　安心・安全な学校運営に向けた、教育環境・教育活動の充実 ３　コミュニティ・スクールの進化と SSN との一体的な推進 ４　一人ひとりが力を発揮するための授業力の向上、業務改善と教職員の健康・安全の確保

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和６年２月１６日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	（現状） ○全国学力・学習状況調査では全国平均と比べて良好な結果である。市の学習状況調査では、ほぼ平均である。 ○市学習状況調査では、各教科とも「好き」と答えた児童が高学年で市平均を上回っており、特に理科に関しては、その傾向が顕著である。 ○算数科において中尾小スタンダードが確立された。問題を解釈し、自分の考えをもち、伝える場面では、着実に成果が表れている。 （課題） ○コンピュータを使って調べたり、まとめたり、興味関心に合わせて学習したりすること、また、反復学習のツールとしての活用に学年・学級の差が生じている。 ○国語において、読むことや情報の扱い方に関する事項が市平均と比べて低く、無回答率が全国や市平均より高い。算数科で培った読解力の活用を他教科にも広げていくことが課題である。	・読解力の育成・向上 ・児童アンケート ・算数検定 ・教師アンケート	①全国及び市の学習状況調査の結果を基に、読解力に関する状況を分析するとともに、学校課題研究で、より効果的な手立てを設定し、読解力向上を図る。 ②児童が自己の結果を振り返ることを通して自己評価力、自ら課題をもつ力、チャレンジする力を養うようにする。 ③算数科での中尾小スタンダードと算数検定の継続を図り、指導方法を共有する。	①調査結果の分析結果等を踏まえ、授業改善の視点や手立てを設定することができたか。また、読解力に関する問題について、正答率を 85%以上とすることができたか。 ②児童が自らの採点を基に、学習状況を掴み目標を立て、自らの課題に向けて行動したか。授業では、80%以上の児童が自らの考えをもち、記述することができたか。 ③指導方法の工夫改善について、8 割以上の教師が、肯定的回答をすることができたか。	・学校独自の視点で、読解力の育成をめざした授業実践の記録を基に、読解力に関する系統表を作成し、読解力の育成に努めた。 ・授業改善の手立てが適切かどうか、研究授業を中心に検証を行い、次年度に向けての検討を行っている。 ・授業に関する児童・保護者へのアンケート調査では、肯定評価がそれぞれ９２％・９８％だった。 ・児童が自らを振り返る場面を授業の中で増やしていく。	B	・次年度は、作成した系統表や教科横断的な視点に立った授業実践の結果を基に教科を精選し、取組を読解力に重点化して、その向上を目指す。 ・市の学習状況調査では、ネットワークの不具合があり、自分の回答をすぐに振り返ることができなかったので、次年度は問題文の提示方法や回答の確認について準備しておく。 ・児童が自らを振り返る場面を授業の中で増やしていく。	○ICT でしか授業をしたことがない教員が増えたときに、何か不具合が起こった時でも対応できるようにしておく必要がある。デジタルとアナログの両立をしてほしい。 ○デジタルの良さは分かるが、先生たちの負担の大きさが心配になる。ICT 以外の面がおろそかになるのでは。対面とオンラインとのハイブリットは質を下げずに授業をするのが大変そうである。
		・学びの自律化に向けた ICT の活用	①朝自習時にタブレットタイムを設け全学級での ICT の活用場面を増やす。 ②基礎学力の向上と反復学習を目的としてスタディサプリやドリルパークに児童自ら取り組むようにする。	①児童生徒の端末活用状況の活用率が前年や年度当初を上回ったか。 ②児童アンケートにおいて、ＩＣＴ機器の利点を児童が意識できたか。	・６年児童生徒の端末活用状況は、９月の調査でほぼ毎日使うが 13.1%の上昇であった。週３回以上の活用では、33.3%の上昇が見られ、現在も活用場面は増えている。	A	・スクールダッシュボードの利用により、データのフル活用から、授業改善及び学びの自律化を目指し、より効果的で安全な活用場面を検討し、取り組んでいく。	
2	（現状） ○全国及び市の学習状況調査での「学校に行くのが楽しい」との肯定的回答は高学年では、平均を上回っているが低・中学年では、２ポイントほど下回っている。 ○規範意識が高く、先生や友達の話をよく聞き、あいさつも自分から行う児童が多い。 （課題） ○不登校や病気以外の理由で欠席する児童がコロナ禍以降増えている。5 月末現在、15 日以上欠席の不登校児童及び不登校傾向児童は８名（昨年度１１名） ○教室に居られない児童への対応 ○学校の老朽化に伴い、校庭を含めた施設・設備の維持・管理が課題である。	・児童一人ひとりへの細やかな教育支援や教育相談に向けた校内体制の充実 ・関わりを大切にした学校行事の充実	①定期的な教育相談日を設け、SC,SSW を活用した保護者・児童面談を行い。必要に応じて、随時、ケース会議を開催する。 ②教室に入れない、居られない児童の居場所の設置・周知・運用を図る。 ③縦割り活動を重視した、集会や活動（さくらんぼ集会等）の実施	①コーディネーターを中心に教育相談日が活用され、SC や SSW と連携やフィードバックする場をもち、迅速・組織的対応が行えたか。 ②関係児童の居場所を「学習スペース」として活用できたか。 ③学校評価に係るアンケートの関連する項目で８５％以上の肯定的評価を得ることができたか	・生徒指導・教育相談の充実についての保護者の肯定評価の平均は９１％となったが、児童の評価は８０％と乖離があり、児童への支援について引き続き丁寧な対応を継続していく。 ・学習スペースは少しずつ活用が図られている。 ・体験的学習の充実については児童・保護者とも９５％を超える評価だった。	B	・不登校等欠席児童の家庭とのつながりについて担任等だけでなくＳＣやＳＳＷとの連携が更に必要である。 ・スクールダッシュボードの利用により、一人ひとりの心の状況を細かく把握し、より丁寧かつ適切な指導支援を実現していく。 ・学習スペースは、教室に入れない子だけでなく、取り出しの子にも対応できるように、職員の配置や部屋の模様替えなどを行っていきたい。 ・学校独自の行事や活動を出来る限り継続していきたい。	○小中連携の重要性を感じる。不登校では、小学校での経緯を引きずって中学校に上がってきてその影響が出ていることがある。小学校でのリーダーが、中学校でリーダーになれなかった場合、極端に自己肯定感が下がってしまうこともあり得る。 ○スクールダッシュボードは、使い勝手の面で課題があるのが実情。学習面も含め個人カルテのようにデータを残していけるのはいいことだと思う。
		・安全な教育環境	①　毎月の安全点検の結果を把握するとともに、校内の施設の巡視を週に１度行う。	①施設の危険箇所・要修理箇所の把握に努め、早期の対応が行えたか。	・日々の施設巡視と月ごとの安全点検の結果を確認しながら、調整・修繕・外部への修理依頼等をそれぞれ判断して対応した。学校評価では保護者による肯定評価が９７％だった。	B	・引き続き施設・設備の安全点検を日々行い、危険箇所の早期発見や修繕対応を行っていく。 ・区画整理事業に伴う校庭使用制限に対しきめ細かい計画的使用を行う。	
3	（現状） ○昨年度、学校運営協議会を立ち上げ、目指す児童像と地域像について熟議を行い、「地域と共にある中尾の子ども・あいさつと励ましにあふれる中尾の地域」として、地域全体で育てていくことを確認した。 （課題） ○本年度は、昨年度確認した、「目指す児童の姿」を、地域や家庭と共有し、ＳＳＮとの連携を図りながら推進していくことが課題である。	・目指す児童像の姿を地域・家庭全体で共有するための場づくり ・SSN との連携による地域の一員としての中尾っ子の育成	①教職員へは校内研修で、家庭・地域へは懇談会や学校だより、ホームページで情報発信を行い、目標とビジョンの共有を行う。 ②保護者だけでなく、SSN 会議参加者に授業や学校行事の場面を公開する。 ③コロナ禍で滞った地域への体験学習の復活や拡充を図る。また、地域の行事への児童の積極的な参加を促す。	①校内研修、懇談会、学校だよりやホームページなどで、各１回以上、情報を発信することができたか。 ②地域との関わりに関する教員や保護者の学校評価アンケートにおいて、肯定的回答が 90%を上回ったか。 ③市の生活習慣に関するアンケートの地域に関する項目で８０％以上の肯定評価を得られたか。	・情報発信については、紙媒体が必要な家庭を除いて、ペーパーレス化を進めている。 ・「開かれた学校づくり」の保護者の肯定評価は９３％であった。 ・学校運営協議会委員に、授業以外での児童の様子を参観してもらうことができた。 ・学校運営協議会では、地域に関する６年児童の意見文を紹介し、地域との繋がりの大切さについて共有できた。そのことがきっかけとなり、１年生の生活科（昔遊び）の講師として地域の方に参加してもらい、児童との交流を深めることができた。	A	・来年度当初から家庭向け文書の電子化を図る予定である。 ・学校運営協議会において、協議題を焦点化・明確化し、活発な熟議を通して、学校運営の改善につなげていく。 ・学校、家庭、地域それぞれの立場からの働きかけを通して、児童のあいさつの更なる向上及び安全の見守りの強化を目指す。	○小学校の対応の素早さを感じた。知っていれば声をかけたくなり、コミュニケーションのきっかけが生まれる。保護者のことを知っていただくことも大切。地域と保護者の交流もぜひ進めてほしい。 ○交流が子ども世代と祖父母世代だけでなく保護者世代も入れて進めてほしい。
4	（現状） ○昨年度までの学校課題研究の実践により、算数科でのスタンダード化が図られた。 ○高学年の一部教科担任制の実施により、学年を全体で見合い、深い教材研究ができている。 （課題） ○ICT の活用方法について、エバンジェリストが中心となり、推進を図っているが、活用に学級差が見られる。個別最適化に向けて活用の日常化が課題である。 ○キャリア段階に応じた、資質の向上が求められる。 ○働き方を意識した、業務改善と教職員の健康・安全を確保する。	・ICT 研修 ・一人ひとりがやりがいをもって力を発揮できる学校 ・働き方を意識した業務改善	①学校課題研究の中でＩＣＴの活用を重点化し、年間を通して、授業の中での使用場面を意識した研修を継続して行う。 ②対話に基づく受講奨励を行い、一人ひとりの教員が、自らのキャリア段階に応じた研修への自主的な参加を促す。 ③月１回の業務改善委員会、計画年休、学年で定める定時退勤日の実施。また、具体的な学校行事のスリム化を行う。（やり方、時間短縮等）	①全ての教員が個別最適な学習形態を目指し、日常的に ICT を活用する状況になったか。 ②キャリア振り返りシートの自己評価で１つ以上のアップが見られたか。 ③教職員の勤務状況に関するアンケートで肯定評価８５％以上が得られたか。	・年３回の研究授業を実施し、全教員で授業研究を進め、授業力向上に取り組み、「中尾小スタンダード」が定着してきている。 ・日常的なＩＣＴの活用は、エバンジュリストを講師とした校内研修を行うことで全職員に広がっている。 ・キャリア振り返りシートの自己評価は４月の第１回との比較で全教員が１つ以上の向上が見られた。 ・職員の在校時間（月あたり）が昨年度に比べ、1 時間短縮された。 ・職員の時間調整に関して明確な文書掲示を行い、年間を通して、年休等を取りやすい雰囲気の醸成に努めたことで、平日に使用する場面が増えた。 ・職員ストレスチェックでは、「上司からの支援及び同僚性」の項目において、全国平均を約２ポイント上回った。	B	・読解力向上の研究を通して、「中尾スタンダード」の一層の定着による全教員の授業力の向上を図る。 ・教職員のＩＣＴの活用能力を更に高められるように、より効果的な活用方法や活用場面の研修を行っていく。 ・教職員の自己評価を活かしながら対話に基づく受講奨励を今後も継続して行う。 ・教職員の同僚性が高まっている。良好な人間関係の維持・継続を図っていく。	○小学校でも各学年に副担任を置ければ業務改善につながる。 ○業務改善において、スリム化を進めると同時に、切り捨てる部分がなくならないように気を付けたい。学校としても情報提供をしっかりしていただきたい。 ○ICT の取組を進めることによって情報が全く届かなくなる層も一定数あるのでバランスをとって進めていくことが大事である。